

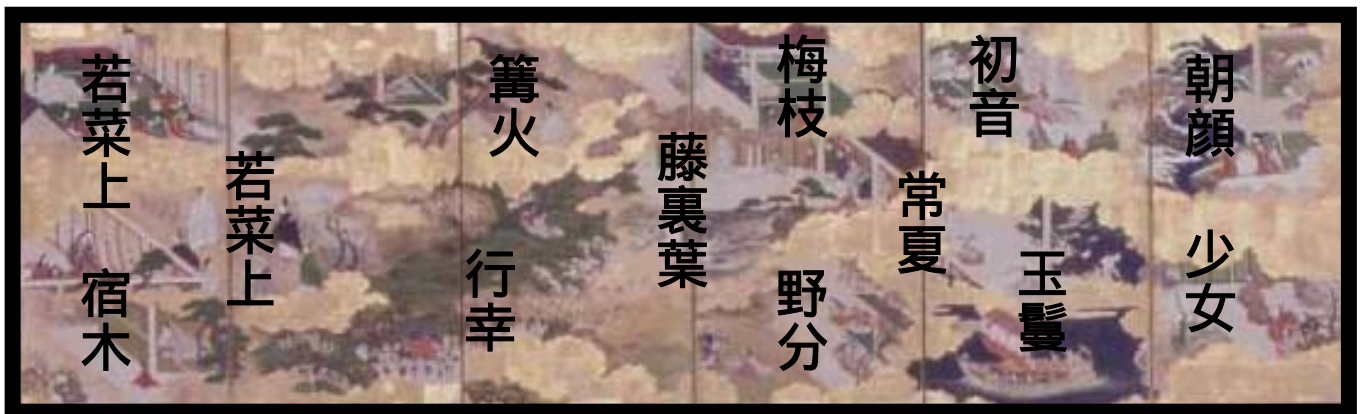
げん じものがたりこびょうぶ  
**源氏物語小屏風**

六曲一双 紙本金地著色 縦 81.6 cm 横 269.4 cm

江戸時代前期(17 世紀) 松井文庫所蔵



【右隻】



【左隻】

『源氏物語』は、今から約 1000 年前(平安時代中期)、<sup>むらさきしきぶ</sup>**紫式部**(973 頃～1014 頃)という女性によって書かれた物語です。平安時代の貴族社会を舞台に、主人公**光源氏**と彼を取り巻く人々の愛憎や苦悩を、**54 卷**にわたって描いたもので、絵画や工芸などの分野にも影響を与えています。**源氏物語の絵画化**は、はじめは絵巻物の形式で行われました。もっとも有名な作品は、国宝「源氏物語絵」(平安時代・12 世紀、徳川美術館・五島美術館蔵)です。物語絵の制作によって、

<sup>ふきぬきやたい</sup>**吹抜屋台**(天井がなく、室内が<sup>ふかんてき</sup>俯瞰的に見える)という独特の表現方法が考案されました。その手法は、屏風絵の中にも見ることができます。

松井文庫に所蔵される、やや小さめのこの屏風は、『源氏物語』54巻のうち、22の巻から選んだ**23の場面**を描いています。描写は繊細<sup>せんさい</sup>で、絵の具も上質のものが使われています。屏風の縁金具に「九曜紋」がついていることから、**細川家ゆかり**の品と思われます。おそらくお輿入れの道具の一つとして、持参されたものかもしれません。

松井文庫の所蔵品で、源氏物語に関する作品は、このほかに源氏物語屏風(屏風装・六曲一隻)、源氏物語夕顔図(掛幅装・一幅)などがあります。また、源氏物語は**着物や調度品の文様**<sup>ちやうどひん</sup>としてもっとも好まれた題材の一つでした。例えば、本品右隻に描かれた「夕顔」の



源氏物語小屏風右隻「夕顔」部分

の場面を見てみましょう。『源氏物語』巻四「夕顔」は、光源氏が、夕顔の花が咲く家の女に恋をする話です。源氏の誘いに、女は「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」という歌を、夕顔の花とともに**扇にのせて**渡します。この印象的出来事によって、**夕顔の花と扇**だけで「夕顔」を表します。

「夕顔」を文様にした工芸品は、たくさんあります。それを見る人々は、物語について、あるいは登場人物について、さまざまな思いをめぐらせたことでしょう。

当時の人々にとって、古典文学は、単に教養として覚えなければならないもの、というだけでなく、**日々の楽しみ**の一つとして生活の中に浸透<sup>しんとう</sup>していたといえます。

太鼓の胴に蒔絵で表された夕顔文様



能装束（唐織）に表された夕顔文様